

富士山の森林

富士山の北側には、その大半が伐採など人間の手がはいっていない手つかずの森、青木ヶ原樹海があります。この森林はかろうじて 1,000 年といったところで、その一部が未だに富士山の一部に見られる、原始林と呼ばれる昔の風景と取り変わったものです。

静かな海

樹海は、864 年の貞観大噴火による溶岩流で形成された大地 30 平方 km を覆っています。この噴火が、この地域全体の地形を変えてしまったのです。溶岩流は水路を塞ぎ、後に西湖と精進湖となったふたつの独立した部分のみを残して割（せ）の海として知られる広大な古代湖の大半を埋め尽くしました。このエリアを上から見ると、当初の環境に溶岩が流れ込むことによりできたことがすぐにわかります。この、「樹海」という名前は、この森林の規模だけではなく非常に平坦であることにも由来するものです。

岩盤が形成されてから 1,000 年経った今でもこの森の土壌の層は未だに薄く、養分も不十分です。ここの火成岩は非常に多孔質で、丈夫な植物のみがここで露出した根を苔の生えた地面に絡みつけ成長することができ、ここに生える木の大半が、コメツガ、カラマツやヒノキなどの常緑針葉樹です。

溶岩層の「うね」や破裂跡は、この景観に別世界のような美しさをもたらし、火成岩は音を減衰させる傾向があるため、森林の散策を驚くほど静かなものにします。方位磁石が誤作動するという噂は真実ではありません。冷えた溶岩にはある程度の磁気特性がありますが、方位磁石を直接地面に置いていない限りは、その磁力は方位磁石に影響を及ぼすほど強くはありません。それでも、この森は巨大であり、はっきりとした目印がないため、登山道からはずれないようにするに越したことはありません。

原始林 - 過去の記憶

864 年の貞観大噴火は、マグマが山頂から溢れ出す代わりに山の側面から噴出する側噴火でした。富士山北麓には未だに古代の姿そのままの原始林だと考えられている森林が所々見られます。これらのエリアは原始林と呼ばれ、噴火場所より上にあった、もしくは断崖または岩の露頭が溶岩を遮蔽したことにより残存しています。

新しい森と古い森にはほとんどその違いが見られないことがありますが、その違いとしてひとつの決め手になる点は、土壌があまりない火成岩だらけのその他の場所とは異なり、古い森を歩けば厚さ数センチを超えるの土壌が足元に感じられることです。また、生えている樹木の種類も異なります。原始林は一樣ではありませんが、新たに形成された森と比較すると、ウラジロモミなどの常緑樹が点在する中

にブナやミズナラなどの落葉樹がより多く見られます。山をさらに高く登ったところにある寒い原始林では、ツガやシラビソなどが生い茂っています。

原始林エリアの多くは登山道の本道からほど近いところにありますが、森の他の部分と同様に、迷わないように気をつけましょう。比較的アクセスしやすいブナの一帯は、本栖風穴からほど近い大室山の陰に見ることができます。